



モデル初期日本語教室の様子(磐田市)
教室に参加した外国人からは、「楽しかった。」「もっと勉強を続けたい。」「友達も連れていきたい。」などの声があった。



「やさしい日本語」パンフレット
(右が日本人用、左が外国人用)

世界の人々との交流の拡大 内なる国際化へ

言葉の壁のない“ふじのくに”

世界の人々との交流拡大を目指し、地域外交の深化や通商の促進、国際競争力の高い観光地域づくりを進めてきた静岡県。今回は、内なる国際化の実現に向けて取り組みを加速させている「やさしい日本語」の普及・活用事業を紹介する。

伝わるのは英語より日本語

静岡県には、約10万人の外国人県民が暮らし、その出身国や地域は120を超える。県は、「ふじのくに多文化共生推進基本計画」を策定して、「多文化共生社会の実現に取り組んでいる」。

多文化共生社会とは、外国人と日本人が安心して快適に暮らし、それぞれが能力を発揮できる世の中を指す。しかし、その前に立ちだかるのが言葉の壁だ。

日本人は「外国人とのコミュニケーション＝英語」という意識が強い。しかし、県内在住の外国人はブラジル、フィリピン、ベトナムなど多国籍で、大半が英語圏以外の人たち。

今年度はさらなる普及・活用へ向けて、「やさしい日本語」の活用研修を行政向けと民間向けに開催。県や市町の職員を対象にした研修では、難解になりがちな行政文書を「やさしい日本語」に変換する方法を学んだ。研修後は広範な行政情報発信の場で実践することに加え、それぞれが作成した文書を専門のアドバイザーが点検・指導し、ブラッシュアップしている。

民間向けの研修は、主に観光関連の従事者が対象だ。外国からの観光客には日本語でのおもてなしが喜ばれるという。そこで

外人たち。県の調査では、日本語で会話ができる「少しできる」と答えた外国人は8割を超えるが英語は4割以下。つまり、県内在住の外国人に一番伝わる言語は「やさしい日本語」だ。

「やさしい日本語」とは、わかりやすい日本語のこと。難しい言葉を言い換えたり、文を短くするなど、相手に配慮した日本語は、外国人はもとより、子どもや高齢者、障害のある人などにも伝わりやすい。

人間関係の構築はコミュニケーションから始まる。会話がなまなま相互理解を深めるのは難しい。そこで県は、日本人県民に向けた「やさしい日本語」の普及

で、「おもてなしのための」と銘打ち、東京2020オリンピック・パラリンピックなどにより来県が見込まれる外国人観光客の対応の場での活用を促す。

また、「話そう、やさしい日本語」と題した動画を制作。YouTubeで配信し、一般への普及にも努めている。イメージキャラクター「やさ日富士夫くん」を描いた缶バッジは2種類製作し、やさしい日本語を学んだ人に配布。日本人と外国人の双方がバッジを付けることで心の壁も取り払う効果を狙う。

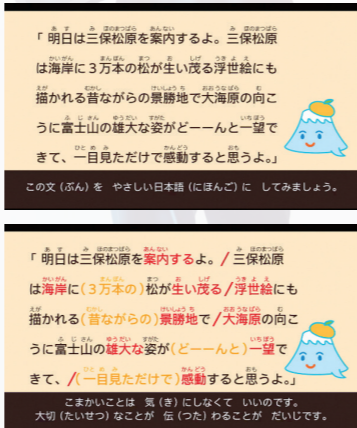
対話交流型のモデル教室

「内なる国際化」でもう一つの軸になるのは、「地域日本語教育体制の構築」だ。これは、希望する全ての外国人が、身近なところで生活に必要な最低限の日本語を学べる場づくりを推進する事業で、本年度は、磐田市と菊川市が「モデル初期日本語教室」を設置。今後5年間で全県への拡大を目指す。

及・活用促進と、外国人県民に向けた「地域日本語教育体制の構築」を両輪に、新たな事業を展開。心と言葉の壁のない関係づくりを目指している。

相手が誰でも伝わる言葉へ

「やさしい日本語」普及のため、昨年度から行っているのが「富士山やさしい日本語化作戦」というユニークな取り組みだ。日本の象徴である富士山をテーマに、企業・NPO・行政などさまざまな立場の人々が参加して、神社や観光施設等の案内表示を「やさしい日本語」に置き換えるなど、自主的に「やさしい日本語」を実践した。



三保松原を題材にした「やさしい日本語」への変換例。

異なる言語の外国人同士が交流する機会の創出も期待できる。

外国人も日本人も、誰もが「やさしい日本語」を使って気軽に会話を交わし、相互に理解し合い、外国からの観光客をもてなす「ふじのくに」。これこそが、目指すべき多文化共生社会であり、内なる国際化への大道だ。

いわれる文法や文字の学習を中心とした従来型の語学教室ではなく、地域住民が学習支援者として参加する「対話交流型」のスタイルを特徴とする。教える側も学ぶ側も対等の立場で、相互に「やさしい日本語」を使って会話をすれば、互いの文化や暮らしを知り、尊敬の気持ちを醸成することもできるだろう。また、日本語を介して



「やさしい日本語」の手引きと啓発用チラシ



動画のQRコード。「やさしい日本語」について、コンパクトにまとめられた動画は一見の価値あり。



普及啓発動画「話そう、やさしい日本語。」